

認知症初期集中支援チーム 活動報告

(R6年6月17日現在)

1 チーム員会議について

支援方針、支援内容、支援頻度等を検討するため、専門医を含めたチーム員会議を行うもの。

(1) 開催回数
令和5年度 11回

(2) 出席者

認知症サポート医(伊丹市医師会)、認知症地域支援推進員、チーム員(地域包括職員)、介護保険課
 ・令和3年度から、認知症疾患医療センターの公認心理士がアドバイザーとして出席。
 ・令和5年度から、認知症疾患医療センターの精神科医師がアドバイザーとして出席。

2 支援を終了している事例 ※前回の本協議会后に終了となったもの

No.	性別	年齢	初回相談者	相談経路	支援開始	支援終了	診断名	対応結果	
支援を終了した事例	1	女	86	家族	地域包括支援センター	R5年8月	R6年2月	アルツハイマー型認知症	介護認定はあるが本人の拒否が強く、介護保険サービス未利用。被害妄想や他者への暴言、徘徊等があるも定期的な医療受診なし。同居の長男や近隣に住む長女は、ともに精神科への受診を希望。まずは医療受診を目標に、介護保険サービスの利用まで見据えて支援開始。精神科の受診ができ、抗精神病薬内服によって症状が落ち着いた。サービス利用をチーム員が家族に進めたが、家族が拒否されたため利用につながらず。家族の困り感が無くなったため、支援終了。
	2	女	87	近隣住民	地域包括支援センター	R5年9月	R6年2月	—	長男・長女とともに3人暮らし。長女は統合失調症および知的障害があり、本人と共依存の関係。日常生活の支援は、一般的に長男が行っている。本人は認知機能の低下がみられるが、認知症の診断は受けていない。また、要介護2の介護認定はあるが、サービス利用については、長女の世話を理由に拒否的。適切な医療受診および介護保険サービスの利用につなげることを目標に支援開始。チーム員の介入で、医療機関への受診ができた。共依存関係により、本人だけが外出するデイサービスの利用にはつながらなかったが、ホームヘルパーの利用につながった。介護保険サービスの利用につながったため、支援終了。
	3	女	74	家族	地域包括支援センター	R5年11月	R6年5月	レビー小体型認知症・アルツハイマー型認知症	玄関先に腐った野菜が大量にあるほか、自宅内にも物が多く、不衛生な状態。要支援1の認定はあるが、サービス未利用。同居の次男や別居の長女とも連携しながら外出や人との会話が好きであるため、デイサービス等の介護保険サービス利用につなげることを目標に支援を開始。チーム員の介入により、区分変更のための医療機関受診や、週6回のデイサービス利用につながった。自宅の環境は変わらなかったが、介護保険サービスにつながったことから、支援終了。

	No.	性別	年齢	初回相談者	相談経路	支援開始	支援終了	診断名	対応結果
支援を終了した事例	4	男	82	警察	地域包括支援センター	R6年3月	R6年3月	—	妻への虐待から警察に拘留。拘留中に尿便失禁やもの忘れ症状があり、釈放後、地域包括支援センターが関わっていた。介護保険の認定申請のために医療機関受診をするように地域包括支援センターから提案するも、受診を忘れていたのか、受診したくないのか理由は不明だが、一向に受診できない状況。見当識障害があり、認知症が疑われていた。まずは医療機関受診を目標にチーム員へ依頼があった。チーム員が、様子確認のために電話連絡をしていたが、本人が医療機関受診したため、訪問前にチーム員の関わりが終了となった。

3 支援中の事例

	No.	性別	年齢	初回相談者	相談経路	支援開始	支援終了	診断名	対応結果
令和5年からの継続事例	1	女	82	家族	地域包括支援センター	R6年3月		認知症	物忘れがひどく、通販や訪問販売で契約したことを忘れてしまう。もともと社交的ではなく、近所づきあいや友人がいない。月2回の供え物の買い物は欠かさずしており、金銭管理は本人がしたいという思いがある。デイサービス等の介護保険サービス利用につなげることを目標に支援中。
令和6年度新規事例	1	男	73	家族	地域包括支援センター	R6年5月			昨年末頃から壁に話しかけたり、無くなった人の名前を叫んで腕を振り上げたり、家族には見えない誰かとケンカをするようになった。家族が本人に病院受診を促すが、本人は「自分は正常だ」と受診を拒否。昼夜関わらず幻聴・幻覚に翻弄されており、独語がひどい。本人の対応に家族が疲弊している状況。医療機関受診を目標に支援中。